

第七章

付随的な調査 : Roger Bacon (A.D. 1214?-1292?)

この章は必ずしも、しばしばヴォイニッチ手稿と結びつけて考えられる 13 世紀の学者に近づくための短く、一般的な再検討ではない。セクション 2.2.2 では手稿の著者の可能性として Bacon を取り上げてきたが、間接的にもそれを支持、否定する確かな証拠は得られてはいない。それでも手稿に興味を持つ人は誰でもが（そして実際西洋思想の歴史を研究する人は誰でもが）たとえ深く知るだけの価値があるだけだとしても、可能な限り修道士 Bacon について学ぶべきである。彼は彼の著作の中の言葉によって特に近代の読者に（もしくは彼の著作が入手しやすくなったからかもしれない。）注目されている。彼の同世代人たちは彼についてほとんど記録を残していないので、彼について今日知られていることのほとんどは彼の著作からである。彼の多くの著作や 19, 20 世紀の学者によってなされた彼の様々な研究や生涯についての研究からは、それらが蓋然的な知識と科学、神と自然、人間の価値と技術の目的の豊かな洞察を与えてくれている。それらは現在でも我々が直面していることであるが、しかし私たちはそれらを近代の専門用語で覆い隠そうと努めている。

7.1 Roger Bacon の作品と彼についての研究

Bacon の生涯と著作に関しては多くの研究によって分析され、記述されてはいるが、現在まで真に完全で正しい扱いは試みられたとは言えない。彼の著作のうちごく少数は現代の言語に翻訳されたが、ほとんどがラテン語の形でさえ未編集で出版はされていない。Bacon 自身も著作を繰り返し使用することで、多くの著作の断片的なコピーや部分的な改訂が生まれ、どれが独立した著作なのかを分からなくしている。フランシスコ会のヒエラルキーの中で彼の教義は非難を浴び、結果として後の著述家達の疑いや恐れを生み、多くの研究者が彼の著作を年代や彼の名を記すことなしに引用、複製したせいで混乱を生んだ。これら多くの混乱や困難のせいで Bacon の著作は近代の研究者には入手困難なものとなった。唯一の例外は『大著作 (*Opus Majus*)』(Bacon 1928b)の英語訳である。

Bacon 著作の学術研究は初めに専門的で狭いところから始められた。一つは Bacon に興味を持つ科学史家が近代の客観的な実験的方法の先駆者として。もう一つはカトリックの学者側からの、彼の様々な先見の中世哲学研究に関する観点から。Émile Charles (1861)は彼の初期の仕事にも関わらず、フランスのすばらしい学者として明瞭、公正、しかし同情的な一般的記述をし、完全な献身は広く支持された。この楽しめる人情的な本を注意深く読むことを初めにベーコンへの興味を持つ全ての人にお勧めしたい。それ以後の著述家達は多くの情報を Charles に頼っている。さらに新しいものとしては Stewart C. Easton (1952)がありこれもお勧めする。彼の手法は歴史的な分析を行い、入手できる事実から資料に基づき Bacon の性格や彼の思想を頭に思い描き構成している。James Blish (彼はスタートレックシリーズで有名な科学小説の作家である。)は Easton のベーコン研究に基づいた架空

の伝記を書き、これも私は興味のある読者にお勧めする。

私は Roger Bacon に関する真面目な著作をできる限り手にいれ読むことを試み、彼の知識とヴォイニッチ手稿に関わっている可能性を完全に理解しようと努めた。この論文に付属の参考文献は(ただし私が調査した全ての著作を網羅しているわけではない。いくつかはヴォイニッチ手稿に興味ある読者にはほとんど価値のないものであろうから。)他の西洋言語で書かれたものと同様、多くの英語で書かれた Bacon に関する著作にたどり着けるはずである。

7.2 Bacon の生涯と著作

Bacon は全てではないにしても、ほとんどの人生を学者、教師として過ごした。彼は美術の修士号を取った後、1230, 1240 年代にはオックスフォード大学、パリ大学で教鞭を執った。アリストテレスの自然哲学の再発見が当時の知的興奮の中心話題であった。ヨーロッパで暗黒時代の蛮行と、初期教会の反啓蒙主義によって失われてしまったアリストテレスや他のギリシャ学の資料はイスラムの間で生き残っていた。それらはイスラム教徒やユダヤ哲学者の豊かな解説と共にラテン語に翻訳され、これら初期ギリシャ科学は 13 世紀ヨーロッパに知的改革をもたらした。アリストテレスの哲学と彼の古代ギリシャからの説明、これに対しての反知的な教会の異世界的な見方が作り出したキリスト教の教義に不可欠な部分との相違。また熱狂的な 13 世紀の思想家が歪めた資料との相違。これらを解決する試みが課題であった。

Bacon は新たに現れたアリストテレス自然哲学とアラブの解説を講義することができた初めての学者であった。彼は実際良い教師であり、大学での生活を楽しんだはずである。アリストテレスに関し Bacon が講義をした写しや、長きに渡って学生が録った多くの冊数になるノートは Steele (Bacon 1909-1940)によって編集された。Bacon によるさらに基礎的な地理、算数、そのほかのテーマに関する学生によって録られたノートは他の写本に著され、これについても Steele (1933)が解説している。

大学での研究のある時期 Bacon は突然考え方を変え、約束された教師としての成功を捨てた。彼は独学の道を止め、その当時の「自然科学」であった錬金術、占星術、天文学に興味を持つ無名の学者を捜した。彼は「実験科学」に夢中になった。それは自然を知る方法として収集、系統的比較、他人の自然現象に関する報告を分析することであり、それらをさらに知るために試行錯誤の過程を経て現象を調べることである。Roger Bacon の『scientia experimentalis』は今日の巨大な軍事装備、手順、方法を使った実験室での近代的対照実験とは全く異なるものであるが、同じく客観的な世界へと外側に向けられたものであり、偏見のない好奇心が同じく動機となっている。Bacon はまたラテン語よりも聖書の元になった特にギリシャ語、ヘブライ語、アラビア語、その他の聖書の元になった言語、そしてギリシャやアラブの賢者の知識に重きを置き、それらを神によって啓示された知識の源と考えた。

Bacon は特に目と光の伝達、そして地理、占星、天文、言語、翻訳、聖書批判、そのほか暦や教育の改正、医術、錬金術の様々な主題について書き残している。彼の著書の特徴

はこれら美術や科学の利点として人間の救済、教会の徳を強調していることだ。彼は初めてのそして一流の伝道思考を持っていた人物で、常に道徳的目的や評価基準のないどんな知識も無意味であることを繰り返し説いていた。彼の科学やそれを学ぶ動機は教会の布教活動としてのものであった。彼の時代には多少珍しいものであるが、彼は科学、哲学、宗教の方法論的統一を主張し、彼はこうして方法論者として仲間入りした。興味深いことに Bacon は幾度も哲学や科学の有益さと同じくその「美しさ」も強調していた。(例えば Bacon の *Communia Naturalia* から Frankowska (1971, p. 36)が引用した特徴的な語句で、光学レンズについての論文を書きたいと「quia hec est pulchrior aliis...」言い、それはつまり他の科学より「一層美しい」からだ。)

1240 年代には Bacon は彼の作品について議論をしたことがないという理由でフランシスコ会への入会を決めた。多くの科学の分野からの現代の作家達は我々と同様、この行動に関して冷静な(しばしば宗教とは関わりのない)観点から彼の最大の間違いであったと考えている。彼と上司との関係は全く上手くいかなかったし、それが懲戒や幽閉という 2 つの出来事を招くことになった。(これらの懲罰については Feret 1891 を見よ。) 1267 年に彼は教皇 Clement IV 世から彼の哲学書のコピーをローマに送るよう依頼され、それに応えて彼は *Opus Majus*, *Opus Minus*, *Opus Tertium*(彼の三大著作である。)を執筆した。1268 年教皇 Clement の死後、彼の教育・知的改革を許可・支持する者はいなくなり、Bacon の希望は打ち砕かれた。しかし彼はこの後も *Scriptum Principale* や人間の知識の百科辞典的作品を執筆したが完成しなかっただろうと思われる。再びフランシスコ会により幾度か幽閉されたが、彼の死 1292 年(1294 年とも考えられる。)まで多少の作品を書いている。Bacon の現存する著作やさらなる彼の伝記については Charles (1861), Easton (1952), Little (1892, 1914)で見つけることができるだろう。

7.3 後の時代まで残った重要な Bacon の著作

13 世紀の修道士 Bacon は幾人かの作家によって言われるとおり、近代科学の発明者として賞賛される同名の Francis Bacon よりも見劣りし、その影に埋もれている。現代の作家からは Roger Bacon はイライラする謎と考えられている。彼は彼らのお気に入りの分類に押し込まれることに頑として拒否する。科学の分野の作家は、現在の科学者に期待されるような実験の計画図や実験装置を彼が残していないので、彼の「実験科学」にもどかしさを持っている。スコラ哲学者は哲学者としての彼に関心を持ってはいず、彼の名前は近代の調査から完全に外されているし、他の研究者も短い曖昧な文章を以て彼を無視している。Sharp (1930)は他の伝統的な同時代の者と比べて、簡明かつさほど好意的になりすぎない Bacon の様々な学者としての立場について研究している。多くの作家は Bacon が宗教的神秘主義者であるとする一方、彼を因襲の打破を主張する経験主義者ともし、どちらとも決められずにいる。

Roger Bacon の主な困難はその「団体の一員」としての無資格である。彼は当時の大学で教えられていた学問とは関連を持っていない。そして彼は実際に、彼よりも良く知られていた人物に対し激烈かつ遠慮のない攻撃を加えた。彼は彼らをしばしば「無知の集まり」

とし、「stultitiam infinitum」として糾弾した。合理的な説明としては、この妥協のない闘争が彼への非難の真の原因であろう。彼は彼の同時代人が決して表現し、愛し、理解することのなかった考えを表現しようと試みた。我々は彼が作り上げようとした形式にそれほど同情し理解してはいないが、ある程度肯定的に向きを変えた。Bacon はギリシア、アラブ、ユダヤの書物に基づき、そして僅かながらの同時代人(Robert Grosseteste, Adam de Marisco, Peter de Maricourt)から借用し、信仰、魔術、言語、自然哲学を融合させようと試みた。彼は彼の「経験科学」に賛同して、Peter Abaelard が発展したスコラ学的方法を拒絶、そして当時非常に好まれていた論理学、弁論術を低く見た。しかし一方で Bacon の「経験」はギリシアやアラブの哲学者が「経験」した作り話や経験が含まれていて、それには現代の我々にとっては奇妙な毒蛇の肉の効用、星の影響、空飛ぶ竜が含まれていた。「経験」には聖なる啓示や神の神秘の洞察が含まれた。このようにして Bacon は彼の同時代の人間からは目を背かれ、現代では彼の崇拜者が現れるまでに成功した。

フランシスコ会による非難は彼を執筆や教授の立場から遠ざけ、Bacon は彼の後の時代の優れた学者から忘れ去られる運命となった。彼の多くの著作は実際無視されたが、彼の名前に触れることを恐れた弟子によって間接的に秘密に利用された。彼の名前は彼のいくつかの著作のコピーからは消されている。しかし 14 世紀の終わりには、Bacon は徐々に復活し読まれるようになった。彼の医学に関する作品(Bacon 1928a)は明らかに引用、借用され、後の医学の著者に良い影響を与えた。これと共に彼の *Epistola de Mirabili Potestate Artis et Naturae* (Bacon 1859)、そしていくつかの誤って伝えられた錬金術作品(Bacon 1603; Singer 1932)はとても有名であり、フランシスコ会修道士がオカルトのパワーを持っていると広く伝えられる原因となった。John Dee は Roger Bacon に傾倒した弟子であり、彼の名声や作品を多くルネサンスに伝えた。Francis Bacon は Dee のモートレークにあった図書館で Roger を紹介されたと言われている。Dee は Bacon の著書を愛し、根気強く収集した。ある人は Francis は彼が認める以上に「独房の修道士」に頼っていたとまで言う。

1800 年代から 20 世紀初頭にかけては、Bacon は近代の実験科学やテクノロジーの先駆者として迫害を受けたと認められたことでまた別の脚光を浴びた。多くは彼の「経験主義」への^{ひいき}贖いや、彼が同世代の思想や手法を強く否定したことによるものである。Newbold がヴォイニッチ手稿を解読したと主張し、その中で Bacon が望遠鏡や顕微鏡を發明していた証拠を見つけたとしたこともその波に勢いをつけることになった。カトリック側の作家達は Newbold の理論を「13 世紀科学を正当化するもの」とであると認めた。(Reville 1921, Walsh 1921) Rudyard Kipling は『The Eye of Allah』とよばれる Roger Bacon が主人公の興味深い短い物語を書いた。(Kipling 1926; この物語を私に紹介してくれたのは Tiltman 准将である。)才能のない作家による特徴的な論文は Grove Wilson による人気のある調査、*Great Men of Science* (1942)と呼ばれるものがある。「科学」の天才 Bacon を見舞った教会の魔女狩りによる悲痛なまでの迫害。この恐ろしいほど華麗な散文は Bacon を「実験室」での蒸気機関の發明者として記している。

予想されるようにこの振り子はすぐに逆に振れ、Newbold の理論は Manly と Friedman によって暴かれた。Lynn Thorndike (1916, 1921, 1929, 1923-58)はさらに Roger Bacon を哲学者や科学者と見なすどんな主張も消し去ろうと試みた。Thorndike の記念碑的作品は *The History of Magic and Experimental Science* (1923-58)があり、彼は Bacon を迷信深い中世の

修道士で魔術の信者であり、近代の科学的な痕跡は全く見られない。したがって現代の思想家が注目するに当たらないと退けた。一方、彼は著作の中で全ての中世の作家をほとんど無情に扱い、Thorndike の Bacon を暴くさまは残酷で徹底的なもので、初期の作家が Bacon の寄せる場違いなお世辞に対し、過剰反応気味かつ感情的である。

Steele (1921)は私から見て、Bacon の歴史的な立場について公正に論じているように思われる。彼はほかの Bacon の研究者よりも多くの作品を編集したことがあり、最適任者である。彼は Bacon の未完の *Scriptum Principale* に基づき、彼の計画の概略について次のように語る。「彼と同時代の人物の中で Bacon の立場を考えたとき、何よりも重要なことは彼の手法は完全に独自のものであるということだ。彼の作品は未完ではあるが、おそらく彼と同時代の最も偉大な作品と同じくらい本質的に明確な形式である。Bacon の計画の概要は単に同時代の作家の中で比べるものがないというだけではなく、完全に新しいものであった。アリストテレス以来彼のような作品は生まれてこなかった。人間の知恵の全体系が作り直された。彼の計画の枠組みのうちいくらかは Al Farabi の *De Scienciis* や Avicenna に依っているかもしれないが、概念や手法は明らかに彼独自のものである。」(pp. 141-142)

とても興味深い最近の研究にポーランドの著者 Malgorzata Frankowska (1971)があり、とても好意的で、Roger Bacon の知識に関する貢献や彼が近代思想の発展に果たした貢献を完全に文書に基づいて評価している。彼女はいくつかの Bacon の経験科学に対するアプローチの例の詳細を挙げている。例えば Opus Majus 中での虹の原因についての扱いは、近代の科学者が持つ系統的、分析的習慣を持っていたことを支持する。(Frankowska 1971, pp. 85-87; cf. Bacon 1928b, pp. 587-615) 機器やデータ、手に入れることのできる資料はひどく不足していたが、彼は他人の報告や彼自身の良く計画され、考えられた観察を用いて競合する仮説の中から正しい方法を選び出し、観察、報告される虹の現象を説明する確かな証拠を作り上げた。

興味深いことを記しておく、後に Bacon はスコラ学的方法をはっきりと否定するにも関わらず、アリストテレス(の『*Quaestiones*』)を講義する際にそれを完璧に専門の熟練した使い手としてその論争を分析する形式を発展させた。(Steele 1933を見よ。)スコラ学の手法の核心はデータの扱いであり、正しい方法で論争中の資料に合致、相反する資料(特に聖書や教父著書、ギリシャやアラブの賢者の引用からなる。)をこれら証拠全てから「解決」、「解答」へと結論する試みである。この方法はもし正しいデータを上手く適用できるなら強力な分析手法となるだろう。今日の科学的考えと本質的には資料とするもの(経験的測定というよりも「権威的」なものを引用する。)や目的(宗教的な言葉の上だけの解決)だけしか異なっていない。彼の虹の分析では、Bacon はスコラ学的方法の最も優れた特徴を使い、彼が得られる最良のデータを用いた。

Frankowska によれば Roger Bacon が思想に果たした主な貢献は、自然と科学の方法論がある。他の作家達の意見を彼女は一側面しか見ていないものだと拒絶し、(Easton の場合でさえ、彼の Bacon に対する意見は彼の宗教と神秘的側面を強調しすぎていると彼女は考えている。)次のような賛辞で Bacon の業績を称える。「Bacon は理論上の問題と科学を大きな視野で統合した初めての人物であり、方法と目的の一体に基づく科学の統一を描いた初めての人物でもある。さらに言えば、彼は科学の本質と目的に関して理論的な考察を

始めた初めての人物であり、その考察は後の時代、Francis Bacon やデカルトの時代にさらに洗練されたものとなった。」(p. 134) 彼女は「Roger Bacon の思想には Francis Bacon の実証主義とデカルトの数学的方法が見いだせる。」と結論した。(p. 136) そして彼女も以前の研究者と同様に、Roger Bacon の作品が後の有名な思想家に与えた影響を体系的な歴史研究で実証すべきと勧めた。

彼の作品が全て編集、翻訳され、体系的な研究が既知の資料や現在の思想をもとに専門家によって研究されるまで、Bacon が人間の知識に貢献した確かな評価をすることはできない。彼は彼と同時代人にとっても、現代人にとっても謎が残る扱いにくい人物であり、ある決まった枠に当てはめることはできない。

7.4 Roger Bacon はヴォイニッチ手稿と関係があるのだろうか？

さて、Bacon がヴォイニッチ手稿の著者である可能性、または関わっている可能性について、その質問に私たちはどのような結論を出すべきであろうか？私は自分の見解に対して確かな証拠は何一つ持ち合わせてはいないものの、彼が著者であることはあり得ないと考えている。Bacon が生きた 13 世紀と、おそらく手稿が作られたであろう 15, 16 世紀とは年代が全く一致しない。そしてそれだけではなく、私が彼の知られている生涯や作品を注意深く研究し得た印象、それにはオリジナルのラテン語作品をサンプルとしたものも含まれる。(やむえず急ぎの不十分なものだが、) それらを総合して、Bacon はたとえ囚われや迫害の中でも、ヴォイニッチ手稿のような作品を制作するようなことはなかったらうと感じる。

Bacon は今で言う反逆者や偶像破壊主義者では全くなく、深く熱烈に教会の教えを信じる信仰の人であった。彼はフランシスコ会への入会を望み、繰り返しそこから悩まされ失望しつつも生涯そこに留まることを望んだ。彼は繰り返し、人間の知識の目的は神に仕え、カトリックの信仰を支持し、異教徒を改心させ、アンチキリストの悪の力(そして技術)に打ち勝つことだと主張した。私たちが見てきたように彼はまた数学、方法論、機能的推理に魅了されていた。しかし十分にそのデータや技術を手に入れることはできなかったであろう。

簡潔に言って私は Bacon が田舎じみでいて、訳の分からない奇妙な謎の魔術書を書いたとは思えない。彼が書いた有名な著書はそのほとんどが中世ラテン語で書かれた学問論文であることがはっきりとし、全く理に適ったものである。彼は優れた製図の腕を持っていて、道具を使い表や図を描くことに慣れていて、彼が生物や植物学に個人的に興味を持っていたことを示す作品はない。ちなみに彼は農業の有用性を賞賛していた。彼の医薬作品は彼のオリジナルではなく、他の有名な作品中の薬用植物の図や情報を誠実に編集したものである。彼の占星、天体、錬金術への研究は抽象的かつ伝統的なものであり、方法論的で専門的な傾向があった。それには私たちがヴォイニッチ手稿で見るとような特有の星図であったり、他の女性に飾られた象徴的なパイプ、バケツ、風呂といった評価基準は見いだせない。

私はヴォイニッチ手稿の製作年代は 16 世紀であり、そしておそらく錬金術に関係があ

り、Brumbaugh が指摘するように、オカルトの習得者にとって Bacon の名声は高いので彼のものとされた可能性が非常に高いと思う。(その他のミスリテアスな写本も特に奇妙な図が描かれた魔術や錬金術に関連するものは、過去には Bacon が著者であるとされる傾向があった。)このような作品を綿密で伝統的な Roger Bacon のような習得者が著者であると考えよりも、むしろ私はドイツや中央ヨーロッパのヘルメス主義者や、イルミナティのような小規模異端的結社が彼らの奇妙で危険な教義をヴォイニッチ手稿のような秘密の書の中に隠したと考える方が自然なことではないかと思う。私は Roger Bacon の作品を読む興味ある読者に、この論文の最後にある参考文献の中でリストした特に彼の作品を読むことを勧める。(英語で読める作品はただの一つ『大著作(*Opus Majus*)』だけであるが。)その上で自分自身の結論を出してもらいたい。